スペインの暑い夏

栗　原　尚　子

3年ぶりのスペインであった。街角にあるいは幹線道路の分離帯の植え込みに備え付けられた温度計は，摂氏40度を示している。1990年夏，午後7時のマドリッドである。朝からどんどこどんどこ気温は上がり続け，日中には42～43度に達する。40度を越える気温は生まれて初めての体験であった。尤，これも知らなければ暑いなあという体感でやり過ごしたのかも知れないのに，温度計を見た途端にめまいがして，これは耐えがたいものであるに違いないと気持ちの方が先行してくる。ヨーロッパも異常気象の夏であったが，今日の気温がどうのこうのと頻繁に電波で流され，暑い夏がニュースになるような文化圏に育った影響かも知れない。さすがに日中は人通りも絶え，シエスタは必然のライフスタイルであることを実感する。

今回の調査は，EC統合後のスペイン農業の再編という共通課題のもとで，私に割り当てられたテーマは，リオハのワイン醸造の動向であった。精神的にも肉体的にも調子が悪く，ふらふらしていたのに，「先生，スペインに行けば治ってしまうのでしょう」と学生さんに見事見抜かれ，その期待に違わず，到着早々フル回転の2週間であった。7月23日に出国し，勝負は8月6日までである。これを過ぎると，ECへの統合後，変化しつつあるとはいえ，一斉のヴァカシオネス，研究機関，関連省庁機関に限らず本屋まで閉まってしまうのである。こうなったら商売にならない。そもそもこの期間にこんな仕事をしようと企てる方が，この国にとっては範疇外なのであるからいたしかたない。予想通り，8月6日以降は，まず聞き取り調査ができなくなるリミットであった。

これまで，スペインといってもいつも調査地域は地中海地域であったので，スペイン北部を知る絶好の機会であった。リオハ州の州都，人口11万人のログロニョを拠点としたが，ここは，歴史的には，サンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼路として知られ，18世紀後半以降は，スペインの代表的なワイン産地（ブランドはリオハ）の中心都市として発達し，また，最近では単独県で自治州に制定されたところとして関心をもっていた地域であった。この夏の時期の観光客であふれかえる地中海地域と比べると，日常的な生活が成り立っている落ち着いた地方都市で，やり遂げなければならない仕事を抱えた身にとってはほっとする思いであった。ワイン醸造所（ボデガ）の聞き取りといっても，この時期は，葡萄の収穫期の前で，近代的な工場の大規模なマシーンは休暇中，調査時期としては，この点からも残念ながら適切ではない。こちらに制約条件がある以上いたしかたないことである。

リオハのようなところからみると，かつて調査したイビサ島のようなリゾート地はスペインじゃなくて外国だといいきる人もいる。バルセロナオリンピックを控えて，日本でも，最近特にまたスペインは海外旅行で注目されてきたが，他の国の観光が夏季の長期休暇を中心としているのに対して，日本の場合は，3月が突出している。私の時代には考えられなかった学生の卒業旅行が，日本の海外旅行の特徴的な一形態となっていることを示している。今回，想像以上であったのが，物価の高騰であり，関連して宿泊費用の高騰であった。世界に冠たる物価の高い東京のビジネスホテルにいやに割安感を抱いたのは私だけではないと思う。この影響はやはり，上半期の観光客数の20％減少となって現れ，それによる外貨収入の減少は，スペイン経済にとって無視し得ない。「外国地誌」で，ペリフェラル・ツーリズムを講義してきたが，ヨーロッパにおける南北格差を前提に成り立ってきたこのツーリズムは，スペインでは1980年代後半以降，かつてほどの説明力をもたなくなってきていることを示している。今や，スペイン経済の好調に支えられて，強くなったペセタを懐に，多くのスペイン人がイタリア観光を享受している。

最後に蛇足ながら，あの栗原のことだからリオハワインの調査と称して，飲んだくれていたに違いないと思われましょうが，そうではありません。

やはりアルコールは二人で楽しむのが一番です。